

黙示録19章1-10節 「天における婚礼」

1A 大淫婦の滅び 1-5

1B 天における大歓声 1-3

2B 御座からの声 4-5

2A 子羊の婚礼 6-10

1B きよい亜麻布の花嫁 6-8

2B イエスだけの礼拝 9-10

本文

黙示録 19 章の前半部分を見ていきます。ついに私たちは、神が、ご自分の裁きを全うされて、天において大歓声が挙がる場所を見ていきます。まず、本文全体を読んでみましょう。(本文を読む。)私たちは前回、大淫婦を神が徹底的に裁かれたところを見ました。そのことを天にいる、神に仕えている者たちがみな大歓声を挙げています。そして、地上の王たちと淫行を働いている大淫婦に対して、清純な花嫁が子羊なるキリストと結ばれる、結婚する姿が天にあります。この対比が、今晚注目したいところですね。

1A 大淫婦の滅び 1-5

1B 天における大歓声 1-3

¹ その後、私は、大群衆の大きな声のようなものが、天でこう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救いと栄光と力は私たちの神のもの。」

「その後」とありますが、これは 18 章の最後の部分ですね、24 節を見てください。「この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出されたからである。」このように、主のしもべたちの血を流している大きな都バビロンを、力強い御使いが、大きな碾き臼のような石で海に投げ込みました。それで、天において大群衆が大きな声を上げたのです。ここにいる大群衆こそが、イエスの証しのゆえに死んで行った者たちです。

もう一度、黙示録の全体の流れを思い出しましょう。パトモス島にいるヨハネに、よみがえられ、栄光に輝く主の御姿がありました。主は、「1:19 あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ。」と言われました。ヨハネが見たことは、1 章の栄光に輝くイエス様の姿です。今あること、というのは 2 章と 3 章にある、アジアの七つの教会の御使いに対する、イエス様のことばです。そして、その後起こることというのが、4 章以降であります。

そして 4 章と 5 章には、天における父なる神の御座で、四つの生き物が神を礼拝し、また礼拝を

導いていました。そして 24 人の長老が、ひれ伏しています。そして、この世界を贖う巻物をこの方が手にしていましたが、それを、屠られたけれども、よみがえった子羊が受け取ります。そして、天においてあらゆるものが、子羊に賛美を献げ、礼拝している場面があるのです。ここにいる聖徒たちは、あらゆる国々、民族からキリストの血によって贖われた者たち、すなわち教会です。

それから、子羊が封印を解き始めます。そこで地上に神の御怒りが降ります。その中で、第五の封印で、神のことばとイエスの証しのゆえに、殺された者たちの魂があります。「6:10 聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」聖で、まことのである主が、どうして、裁きを行われないのかという叫びです。それに対する答えが、すなわち 6 章以降に、天からの子羊の御怒りの現れであると言えます。地上に生きる者たちに対する、その罪と悪に対する裁きであります。その中に、患難期においてイエス様を信じていく人々が殺されていくことに対する報いを、主は行われます。

そして、その患難期、最後の七十週目の半ばに、獣がよみがえったかのようにみなされ、彼が拝まれて行きます。そして獣の国が始まります。そこで聖徒たちは、間違いなく殺されて行きます。しかし、その殺された者たちは天においてモーセの歌と子羊の歌を歌っています。そして神の憤りが極みにまで現わされているのが 16 章です。その中で、第七の鉢が注がれたら、大きな都バビロンが滅んだのです。その滅びに至る、もっと詳しい中身を教えているのが、17 章と 18 章でした。その都を主は、地上の王たちと淫行を働き、巨大な富を集め、聖徒たちを殺している大淫婦と呼ばれているのです。

そして場面は、4 章と 5 章において天に戻っているのです。これまでも、天における礼拝の姿は出てきました。天において、そこから神の御怒りが用意されている姿が出てきました。けれども、それらがすべて行われて、最後に残っているバビロンが滅ぼされて、それで大歓声なのです。「Ⅱテサ 1:10 その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。」

「ハレルヤ」と叫んでいます。これは、ヘブル語で、「主がほめたたえられるように」という意味です。1 節から 10 節の間に、いろいろなグループが神をほめたたえて、「ハレルヤ」と叫んでいます。とても有名な曲、ヘンデルのメサイアで歌われているところですね。何をもって、ハレルヤ！と叫んでいるのか？それは、この世の支配者を神が滅ぼしてくださったというところにあるのです。

「救いと栄光と力は私たちの神のもの。」と叫んでいます。彼らにとって、この裁きこそが「救い」です。世における患難をもたらしている者たち、苦しめている者たちがいて、その彼らの力を徹底的に潰し、全く無いものにしてくださっているところに、神の救いが現れています。例えば、人身売

買でとてつもない虐げを受けている若い女性たちのところに、一斉にそのアジトに警察が入り、摘発をしたら、彼女たちは救われますね。そのアジトから救い出されるのも救いですが、そのアジト自体が一網打尽にされたら、それこそが救いです！このことが起こります。教会の携挙は、この世から救い出されることを意味しますが、地上再臨は、この世そのものを滅ぼされるのです。ですから、大淫婦バビロンが滅ぼされる場所に、神の救いが栄光と力をもって現れました。

そして、大群衆は、救い、栄光、力、と叫ぶ時に、その前に定冠詞を付けています。英語の the です。つまり、その救いと、その栄光と、その力は神のもの、と言っているのです。救いというものは、この世界にはいろいろあるけれども、神にのみ救いがあるのだ、ということ。神にのみ栄光があるのだ。神にのみ力があるのだ、ということです。私たちの信仰は、いつもこれを告白して生きています。神にこそ救いがあり、神にこそ栄光があり、神にこそ力があると、そうではないこの世において告白しています。もし、そうでないものを救いとし、栄光とし、力としているのであれば、それこそ偶像礼拝であり、私たちの純真さはなくなり、大淫婦のように霊的に淫行を働くこととなります。ヨハネは第一の手紙の最後で言いました、「5:21 子どもたち、偶像から自分を守りなさい。」

² 神のさばきは真実で正しいからである。神は、淫行で地を腐敗させた大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされた。」

先ほど、6章において殉教した魂が、「聖なるまことの主よ。」と叫んでいました。聖なる方であれば、まことの主であれば、なぜこのような不条理が起こっているのですか？ということになります。けれども、確かにあなたは真実で正しい方であるということが明らかにされたのです。黙示録には、聖なる方、真実な方としての主の姿が現れています。フィラデルフィアの教会に対して、「聖なる方、真実な方(3:7)」とご自身を表しておられます。彼らは迫害されていたからです。私たちは、今の世において、「なぜですか、主よ？」と叫びたくなることがもっともっと、多くなります。しかし、そこでふんばって、信仰に堅く立って、「主よ、あなたは聖なる、真実な方です。」と告白して生きましょう。

³ もう一度、彼らは言った。「ハレルヤ。彼女が焼かれる煙は、世々限りなく立ち上る。」

煙が世々限りなく立ち上っています。ちょうど、エジプトから脱出したイスラエル人が、紅海の上に浮かんでいるエジプト軍の兵士や戦車を見た時に、「もはや、我々を追いかけ、捕まえ、我々を再び奴隷とするものたちは、やって来ない。」という、絶対的な確信と安心とを得ました。今、ここで賛美しているのは、バビロンが自分たちを苦しめることはもはやなく、それが世々限りなく続くということです。つまり、この永遠の裁きは、彼らの永遠の救いを保障しているのです。

2B 御座からの声 4-5

⁴ すると、二十四人の長老たちと四つの生き物はひれ伏して、御座に着いておられる神を礼拝して

言った。「アーメン。ハレルヤ。」

4章と5章に出てくる、四つの生き物と24人の長老は、ここでも変わりなく、神の前にひれ伏して、礼拝しています。今の大量衆が、大きな歓声を挙げているその言葉に呼応して礼拝しています。そして、その礼拝はまた、他の、天にいるすべての、主のしもべを賛美に導く、導き手でもあったのです。いわば賛美リーダーですね。

⁵ また、御座から声が出て、こう言った。「神のすべてのしもべたちよ、神を恐れる者たちよ、小さい者も大きい者も 私たちの神を賛美せよ。」

主ご自身が、彼らの礼拝に呼応して、すべてのご自分のしもべに賛美せよと、促しておられます。5章でもそうでした、天にいる聖徒たちが子羊を賛美したら、無数の御使いがそれに呼応して、それから、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものまでが、すべてがこの方をあがめました。ここ5節の、「すべてのしもべ」とは、人だけでなく、天にいる存在、御使いたちも含めて、この方を恐れるすべてが神を賛美せよ、ということでもあります。

2A 子羊の婚宴 6-10

このようにして、淫行を働く大淫婦は滅ぼされました。その後で、主ご自身だけの支配がすべてになります。そこで繰り広げられるのが、主ご自身の愛する者たち、教会がこの方と結ばれることとなります。

1B きよい亜麻布の花嫁 6-8

⁶ また私は、大量衆の声のような、大水のとどろきのような、激しい雷鳴のようなものがこう言うのを聞いた。「ハレルヤ。私たちの神である主、全能者が王となられた。」

先の天の大量衆が、声を上げています。その声は、さらに大水の音、激しい雷鳴も伴って声を上げています。御使いたちも加わっているのでしょう。そこで、もはや大淫婦のいない中で、この方のみが支配されていることを賛美しています。ここで「全能者が王となられた」と呼んでいます。英語では、Lord God Omnipotent となっています。ギリシア語では、「王となり、当地を始められた」とあります。イエス様が御座から立ち上がり、地上に戻られ、王座に着かれる、ということです。

私たちも、同じ心で、同じ霊によって、この地上で礼拝を献げますね。王と呼ばれるもの、主と呼ばれるものは数多くあります。しかし、イエスこそが王であられ、全能者であることを告白しています。事実、そのようになる日が来るのです。

⁷ 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時に来て、花嫁は用意ができたの

だから。

彼らが喜び楽しんでいるのは、神をほめたたえているのは、子羊の婚礼の時が来たからです。花嫁がここにいます。そうです、黙示録 2-3 章で七つの教会を私たちは見て、天における教会の姿を 5 章で見ました。ずっと患難期を見てきましたが、そこで殉教した聖徒たちはいますが、彼らは今、教会を祝福し、喜び楽しむ側にいます。教会が初めに世から贖い出され、その目的を今、果たすのです。それは、教会はキリストの花嫁だということです。

私たち教会とは何か？それは、水のバプテスマによく表れています。ローマ 6 章にあります、罪に対して私たちは死んだ者となりました。キリストが十字架につけられ、死んで葬られました、罪に支配される古い人は十字架に付けられ、死んで葬られました。そしてキリストがよみがえられました、私たちも新しいいのちに生かされます。つまり、キリストに結ばれた者となったのです。そして、キリストが天に昇られ、御座に着いておられますが、教会にもそれぞれ座が与えられています。キリストが地上に戻られる時は、栄光の姿をもって教会も戻ってきます。私たちが、キリストに結ばれた者として生きている者たちの集まりです。

パウロは、世の汚れから離れて、教会がキリストのものだけになるようにと、努力していました。何かと肉の行ないの多いコリントの教会に対して、「2コリント 11:2 私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから。」と言っています。ユダヤ主義者のような者たちが、コリントの人たちを福音から引き離そうとしていたからです。

そして、エペソ 5 章には、美しい、キリストと教会の関係が書かれています。妻が夫に従いなさいと勧めました、なぜなら教会がキリストを主として従っているからです。夫は妻を愛しなさいと言いました、なぜなら、キリストが教会を愛してご自身を捧げられたからです。「エペソ 5:26-27 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」そして、パウロは、人がその父母を離れて、妻と結ばれ一体になることを話して、それが、キリストと教会とをさして言っているのです。

ここの箇所を読むと、教会は、キリストに結ばれているのですが、実はまだ結ばれていません。それで「花嫁」と呼ばれているのです。キリストが御言葉によって、水の洗いによって、教会をきよめて聖なるものとするためだとあります。そして栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためだとあります。これはまさに、婚礼において花婿の前に来る花嫁の姿であります。エステル記において、王妃の候補である者たちが、12 カ月もかけて、王の間に出るために化粧や身だしなみをしていましたが、そういった準備期間が今なのです。主にお会いするのは、主が戻って来られた時、教会

の携挙です。ですから黙示録の終わりは、「22:17 御霊と花嫁が言う。「来てください。」」とあります。そしてイエス様も、「22:20 しかり。わたしはすぐに来る。」とあります。

当時のユダヤ人の婚姻は、段階がありました。初めは、結婚を両側の親が取り決めることです。まだ小さい男の子、女の子の時に決めます。ですから、マリアがヨセフと婚約していましたが、「ヨセフという人のいいなずけ」とルカは説明しています(1:27)。

そして次にいわゆる婚約の段階に入ります。相手への貞潔が試されます。一年間です。今の婚約とは異なり、法的に結婚と同じようにみなします。花嫁料を払います。この時に、マリアが懐妊したので、律法によれば石打なのですが、ヨセフは内々に離縁しようと思ったのです。そして、花婿が花嫁を引き取りにきます。行列を作って、花嫁の家に向かいます。マタイ 25 章にある、十人の娘の喩えはその時の様子です。そして、花嫁が花婿の家に行き、婚宴に入ります。父の家に、息子が嫁を迎えるための住まいを用意します。すべてが整ったけれども、父が許さなければ息子は花嫁を迎えに行けません。父のみがその時を知っているのです。

そして花嫁は、自分の家で花嫁衣裳を着て待っています。いつかは分かりません。花婿の父が行きなさいと言います。それは夜中です。そして村の人々は角笛や他の楽器で、夜中なのに大きな声を上げて、花婿の行列について行きます。そして、花嫁は、神輿のようなものに乗し、そこに座って、かつがれます。娘たちと共に花嫁は花婿のところに引き取られます。そして家に入り、七日間の婚礼と婚宴が続きます。ヨハネ 2 章の、水をぶどう酒に変えた奇跡は、そのような婚宴で行われました。そして夫婦は部屋に入り、契りを結びます。

私たちは、その婚約をして、花婿が来るのを待っている段階です。イエス様が、弟子たちから離れる時に、言われました。「ヨハネ 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」まさに、ユダヤ人の婚姻の姿を使って、弟子たちに説明しておられるのです。教会は今、この日を待って、整えられている状態です。そして、夜の時に突如としてやってくるとイエス様は何度となく言われましたが、同じように目を覚ましていなければいけません。パウロはその愛の思いを、「16:22 主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。」と言いました。そして、主が天から降りてこられる時に、ちょうど花婿が花嫁を引き取りに来るように、戻ってきてくださいます。そして私たちは主の住まわれる所、天にやってくるのです。そして、そこで婚礼があります。

⁸ 花嫁は、輝きよい亜麻布を まとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」

花嫁の衣装に注目しています。「輝きよい亜麻布」というのは、神の栄光を反映しています。こ

れまでも、何度となく、白い衣が出てきました。大淫婦が、紫と緋色の豪華な衣をまとっていたのに対して、花嫁は、そうではありません。多くの神々を、神以外のものとなつがっていた大淫婦に対して、聖徒たちはただキリストとだけの結びつきを大事にします。先にエペソ書 5 章に出てきたように、御言葉によって、聖霊の洗いによって、栄光の姿に変えられるべく、教会は今、整えられているのです。キリスト者は、栄光の姿に変えられます。「ピリピ 3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」

そして、「その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである」と強調しています。私たちが、主を信じる信仰によって義と認められました。その者たちが信仰をもって生きる時に、正しい行いをしていきます。それは自分たちではなく、主が用意された良い行いなのですが、それらを行なってきます。その行ないが、主の前では大いなる報い、きよい麻布のようにみなされるのです。パウロは、このキリスト者の営みを、「エペソ 4:24 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」とっていました。

2B イエスだけの礼拝 9-10

⁹御使いは私に、「子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ、と書き記しなさい」と言い、また「これらは神の真実なことばである」と言った。

婚姻ではなく、婚宴とあります。披露宴です。結婚式があり、それから披露宴があります。先ほど話したように、当時のユダヤ人は婚礼を行い、婚宴を七日間行ないますから、盛大なものです。

ある人たちは、婚礼は天において行われるが、婚宴は主が地上に戻られて、神の国を立てられる時に行なうと言います。「マタイ 8:11 あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。」

そしてイエス様は、最後の晩餐において、次にぶどう酒を飲むのは神の国が来る時だと言われています。「ルカ 22:16-18 あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をすることは、決してありません。」そしてイエスは杯を取り、感謝の祈りをささげながら言われた。「これを取り、互いの中で分けて飲みなさい。18 あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」イエス様は、ちょうど、ナジル人のように今を見ておられます。

ナジル人は、一定の期間、頭に剃刀を当てず、ぶどうから出てきたものは一切、口にしません。主に献げられた者として、自らを聖別するのです。ご自身が戻って来られるまで、ご自分のものに

なる者たちを引き寄せておられます。そして、私たちは、地上で、主とお会いして、この食事を共にするまでは、最後の晩餐を何度も、何度も覚えるのです。主の死を覚えるのです。そのようにして、主がナジル人のようにご自身を聖別しておられるように、私たちも地上にいる間に、ナジル人のように自らを聖別します。しかし、神の国においては、悪は滅ぼされ、神が王となっておられる中で、私たちは主と共に大いなる祝宴にあずかることができるのです。

イエス様は、この他にも、王子の婚宴についての喩えを語られましたし、この喜びと楽しみに招かれていることがいかに幸いかを語られています。けれども、多くが応答しない、招かれている者は多いが、選ばれている者は少ないと言われました。

そして、「神の真実なことばである」と言っています。そうです、あまりにも良い話なので信じがたいからです。けれども、太鼓判を押しているのです。22章でも、新しいエルサレムについて、「22:6 これらのことばは真実であり、信頼できます。」とあります。信じられないから、真実だと太鼓判を教えているのです。ですから、私たちはこれを真実なものとして受け入れて良いのです！

¹⁰ 私は御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした。すると、御使いは私に言った。「いけません。私はあなたや、イエスの証しを堅く保っている、あなたの兄弟たちと同じしもべです。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのです。」

非常に興味深い箇所です。この姿があまりにもすばらしいので、使徒ヨハネでさえが、神以外のものにひれ伏そうとしました。コルネリウスが、神を敬っていたので、ペテロが来た時にひれ伏そうとしてしまって、ペテロが止めさせたことを思い出してください。同じように、御使いの前でそれを行ってしまったのです。これまで黙示録で、御使いは主ご自身ではないかと思われる程の栄光の輝きを反映していました。ですから、その輝きをみてひれ伏そうとしたのです。これだけ、神の栄光だけを見ていく、栄光を神だけにしていくということが難しいとも言えますね。ユダヤ人は、神殿に栄光を現す神ではなく、神殿そのものを偶像視してしまいましたし、栄光の源ではなく、その反射しているものを拝んでしまいます。

しかし、自分自身の栄光と美に対してうぶぼれて、墮落したのがサタンですね。しかし、神に仕える、この御使いは厳に戒めました。「神を拝みなさい」と言っています。「あなたや、イエスの証しを堅く保っている、あなたの兄弟たちと同じしもべです。」と言っています。

それに対して、主ご自身が礼拝を受けておられます。ヨハネ9章38節で、盲目を癒された人が、イエス様に、ひれ伏しました。そして、トマスがよみがえらえたイエス様を見て、「私の主。私の神。」と言いました(ヨハネ 20:28)。ですから、イエス様は礼拝を受けられても拒むことはありませんでした。ですから、この方こそが神の御子であられることを鮮やかに示しています。

それから、次がとても大事な言葉です。「イエスの証しは預言の霊なのです」ヨハネは、この黙示録を、イエス・キリストの黙示という言葉から始めました。神の啓示、預言は全て、イエス・キリストを証しするものであるということです。ところが、ヨハネが今、御使いを拝みそうになったように、私たちは、イエスご自身から、それ以外のものに逸れてしまう誘惑があります。テモテ第一やテトスへの手紙でも、話が逸れていくことについての戒めているところがあります。イエス様が預言の中心です。主が言われました、「ヨハネ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。」そして、よみがえられてからも話されました。「ルカ 24:27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」

黙示録は、もちろん預言の書です。けれども、聖書預言を調べている時に、私たちが他のことに逸れていくことは危ういことです。イエスが、預言の霊であります。次、11 節以降、イエス様が栄光と力を身にまとして、天から地上に来られる幻があります。主イエスが、すべてのすべてです。